

外国語活動・外国語科

桑山 賢司

1 外国語科における他者とともに編む子供とは

目指す理想像や単元のゴールを目指すなかで、他者と関わることで、教科や教材の知識や技能を伸ばしたり、見方や考え方、自己認識、他者との関係を深化させたりする姿。

これまでの実践から、子供は目指す理想像や単元のゴールとなる活動に向かうとき、異なる他者との出会いの中で、次のような姿を見せた。

それは、自分にはない知識や技能と出会ったとき、それを取り入れて自分のものにしようとしたり、見方や考え方を広げようとしたりしたことである。また、他者との関わりの中で、自分のよさに気付いたり、次に歩むべき方向に気付いたり、自己認識を深めていく姿も見られた。これらは、関わりあった双方に起こることで、これが互いのよさを見直す機会となり、より強くつながり、関係をよりよくするきっかけとなっていた。

第6学年「6-2〇〇アンバサダー！推しの国の魅力を伝えよう『Where do you want to go?』」の実践では、共通の画像に異なる説明をする活動を行った。他者同士が互いの表現を取り入れる姿や、互いに異なる視点からの情報発信を学び合う姿を発話から見ることができた。また、互いのよさを伝え合う活動を通して、自分一人では認識できなかった自己のよさに気付く姿が振り返りから多く見られた。それによって友達に対する見方を、より肯定的なものへと見直す姿も見られた。

2 外国語科における「他者とともに編む」子供を育てるには

① 目指す理想像やゴールを明確にし、高まりの期待をもてるようにする(個人の内面へのアプローチ)

前述の実践では、明確なゴールによって、子供は自分の勧める国の魅力を少しでも多くの友達に感じて欲しいという思いを沸き立たせ、関わりエネルギー源としていた。目指す理想やゴールがあることで積極的な関わりが生まれる。また、外国語科の授業における動機として、「英語がわかるようになりたい・できるようになりたい」という思いは多くの個に内在している。そこで、今自分では到達できなそうだが、頑張れば辿り着けそうな理想の姿や、ゴールの活動を子供と教師で設定する。これによって、子供が具体的な目標を見据えて実際の活動に取り組めるようになり、それが「他者とともに編もう」とする出発点となると考える。

② 異なる他者と繰り返し出会うことを通して、自他のよさを認識する(他者との関わりへのアプローチ)

前述の実践では、自分の表現を繰り返しながら、他者の異なる表現と出会うことで、子供は多くを学びとっていった。理想像やゴールに向かう中で、他者とともに繰り返し英語表現に触れることは、自らの表現に慣れ親しむだけでなく、新たな表現と出会ったり、自己の英語によるコミュニケーションについての自己認識を見直したりすることにもなる。また、友達の新たなよさに気付くなど、友達との関係を見直すことにもなると考える。これによって、子供の表現は定着し、広がりを見せる。そして、「他者とともに編む」ことのよさ、関わりを味わうことができると考える。

③ 子供が失敗を恐れずに、安心して学び合える環境を整える(「他者とともに編む」を支える前提へのアプローチ)

前述の実践では、2人での発話を同時に行ったことで、大勢に間違いを指摘される恐れのない空間を作ったことで、何度も思い切って発話する姿が見られた。

子供は本来よりよく成長したいと願っている。しかし、失敗することに対する恐怖や、恥ずかしさは誰もがもっているだろう。しかし、言語を学ぶ際、失敗し修正することは大変重要な学び方となる。だから、自分の思いや考えを思い切って表出し、失敗できる受容的な環境が欠かせないので

ある。これを、授業内での他者と関わる場面の設計や、教師を含む他者からの承認や称賛による自信の積み重ねによってつくるのが、「他者とともに編む」ための土台となると考える。

